

研究論文

縄文時代早期の鹿角製装身具類について

— 佐賀市東名遺跡出土資料から —

川添和暁

要 旨

佐賀市東名遺跡の調査では、遺跡形成過程、形成時期、遺跡規模、豊富で多彩な出土資料などによって、縄文時代早期末を考える上で極めて重要な情報が多数提供された。本稿では、東名遺跡を代表する列点文装身具と言われる鹿角製装身具を中心に、骨角製装身具類について再検討を実施した。分析では、主に素材取りや加工、欠損状況について検討し、筆者視点での本資料の特異性と性格について可能な限りの言及をした。特に (1) 装飾の主体が鹿角素材表面側ではなくて、鹿角髄側に施されている点、(2) 列点文装身具と言われる装飾が施された「完成品」と考えられるものには、二又部を経由して弧状を呈しているものが現状では認められない点が、注目できるとした。このことは、現在知られている列点文装身具が製作当初の形ではない可能性があり、装身具類として使用している間に欠損もしくは切断などして、現在知られている形になった可能性を提示した。東名遺跡出土資料については、その他素材資料にも触れつつ、川添前稿では詳細に触れることのできなかった、愛知県入海貝塚資料や、神奈川県吉井城山第1・第2貝塚資料についても比較し、骨角製装身具類についても広域的な類似性と、地域的な独自性が認められることを指摘した。地域的な独自性に関しては、同一素材についての利器・工具としての使用器種との対比が必要であると考えられ、その見解の一端を示した。

キーワード：縄文時代早期、骨角製装身具類、東名遺跡

はじめに

骨角器は、骨・角・牙のほか、場合によっては貝製の動物性素材で作られた道具の総称であり、各時代を通じた利用の様相が研究されている。製作状況であると、(1) 製品器種と、(2) 製作関連器種に二分され、(1)の製作関連器種をさらに機能・用途的な観点で見ると、大きく (a) 利器・工具類と、(b) 装身具・儀器類に二分される (図1)。石素材の考古資料であれば、前者は石器、後者は石製品と呼称されるものに当たる。骨角器というと (a)・(b) のような (1) 製品器種の印象が強いものと思われるが、実際に遺跡から出土する資料群では、加工により切断廃棄されたものや加工途上品などの (2) 製作関連器種も多数確認される場合がある。

筆者は、これまで (b) について列島規模での調査検討を実施している途上にある。本稿では縄文時代の初めの頃の様相を見るために、西日本での良好な資料数を有する佐賀市東名遺跡の資料について再検討を試みる訳であるが、今回は特に調査を進めた鹿角製を中心に骨角牙製品について検討を進めていくこととする。

1. 東名遺跡について

東名遺跡については、これまでの発掘調査報告書に加えて、佐賀市教育委員会による一般向け概説書も刊行されている (西田ほか 2017)。これらを参考に、東名遺跡について概略をまとめておく。

東名遺跡は、佐賀平野の北側、背振山地から伸びる丘陵麓の低地内に当たる、佐賀市金立町内に位置する。工事前は水田が広がる景観で、当時の地表の標高は2 m ほどであった。遺跡東側には巨勢川 (戦前は徳永川) が南流し、遺跡の南は北西から南東に流れ込む複数の流路が合流する地点となっていた。東名遺跡では、巨勢川調整池建設に伴い、平成5年から19年 (1993

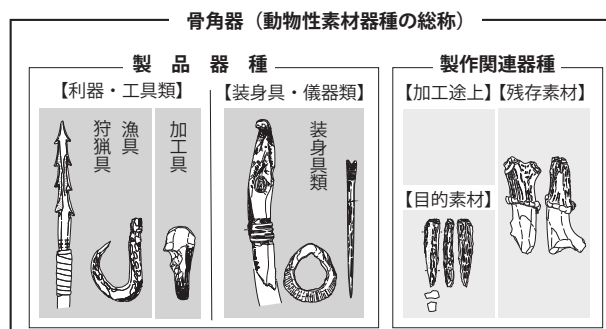


図1 日本列島先史時代の骨角器器種の大別

～2007 年)の間に複数回にわたる発掘調査が実施された。平成 5 年から 8 年(1993～1996)の第 1 次調査では居住域が調査されたが、平成 15(2003)年の掘削工事により新たに貝塚が発見され、第 2 次調査が開始される契機になったという。この第 2 次調査によって、この貝塚は、縄文海進の堆積層(最大層厚 5 m の粘土層)によって埋堆した湿地性貝塚であったことが明らかとなり、動物性遺物のみならず、カゴなどの編組製品を代表とする植物性遺物も豊富に出土した。このように、遺跡形成過程、形成時期、遺跡規模、豊富で多彩な出土資料などによって、東名遺跡が一躍有名な遺跡となり、平成 28(2016)年 10 月に国史跡に指定されることになった。

東名遺跡は、弧状を呈する微高地上に形成された居住域と西側低地部分に形成された貝塚とで構成される遺跡であるとされている。現在、貝塚は、第 1 貝塚から第 6 貝塚まで点在した状況が確認されており、その範囲は南北 500 m わたる。微高地は、東名遺跡の西側にも別に存在していたとされており、その末端には久富二本杉遺跡として貝層が確認されている。貝層が確認された微高地上には調査は及んでいないようであるが、当地一帯に縄文時代早期末の活動域(集落跡)が展開していたことを想定させるものかもしれない。

2. 東名遺跡出土資料の様相

東名遺跡で貝塚の調査がなされたのは第 2 次調査で、第 2 貝塚が調査された。現在知られている資料は、この第 2 貝塚出土資料である。貝層を形成する貝種は、ヤマトシジミを主体としてマガキが混じるとされる。

この第 2 次調査では、多数の骨角器資料が出土しており、縄文時代早期末の様相を伺う上で、欠かせない資料となっている。報告では総点数 288 点とあるが、報告後に追加の整理で確認されたものも加えると、300 点は超えるであろう。288 点中、筆者のいうところの製作関連器種は約 42% を占めるとのことから、製品器種は全体の 6 割弱である。この中で、鹿角素材の遺物は最も多く、さまざまな加工段階の資料が出土している。まずは鹿角に関わる器種から見ていこう。

東名遺跡の装身具類で最も著名なものに、列点文装身具と言われるもの(西田編 2009)があり、出土点数は 13 点に及ぶ(図 4 の 1～9)。その装飾性から、東名遺跡出土遺物を代表するものとして位置づけられる。使用部位は鹿角二又部が圧倒的に多く、角枝端部を用いたものは一点に過ぎない(9)。細かい凹みによって文様を表現するモノで、ネガティブに直線や鋸歯文を描くものが多く、弧線状のものもある。この細かい凹みは、回転穿孔の技法によって施されているもので、貫通させることなく途中で終了することによって凹みとしているものである。凹みを詳細に観察すると、回転時に生じた極めて整った螺旋状の線状痕が残されている(図 4 右下写真)。この器種では、文様は髄を除去した鹿角内面側を主体とすることを大きな特徴とする。また、当初の形を保った完存品はなく、欠損資料が多い。一点、端部に施溝+折り取りで切断がなされているものがあるが、この切断は、細かい凹みの施された後に実施されており、端部に三箇所ある貫通孔も同様である。最終結果として、このような形になったものと考えられる。

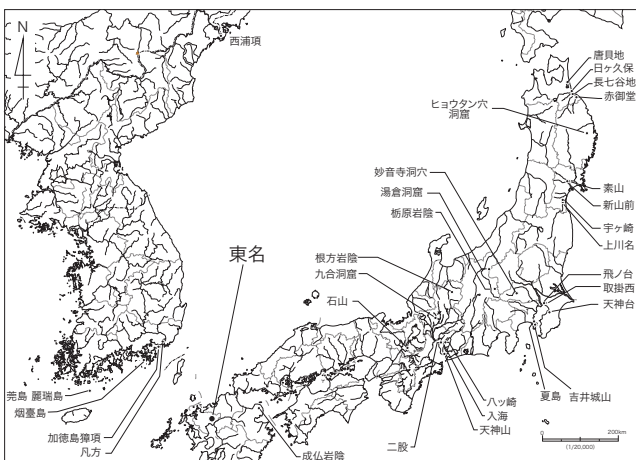


図 2 東名遺跡および縄文時代早期骨角器出土遺跡の位置

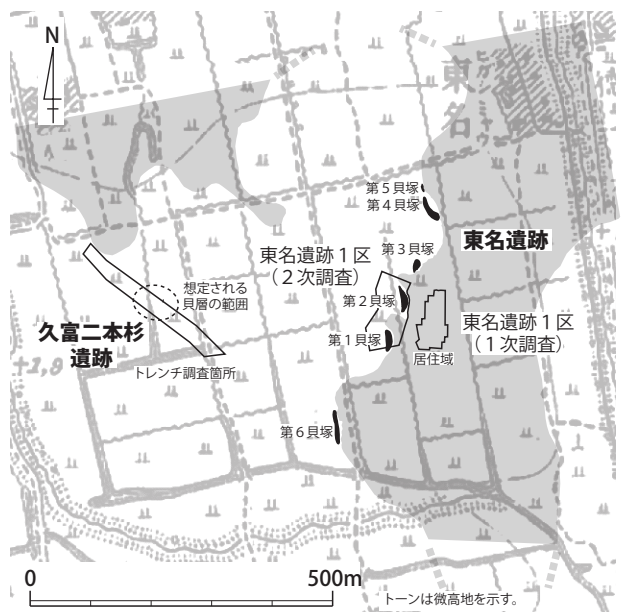


図 3 東名遺跡の位置(旧陸軍陸地測量部 大正 6 年 2 万 5 千分 1 地形図「佐賀北部」をもとに 西田編 2009 を参考に作成)

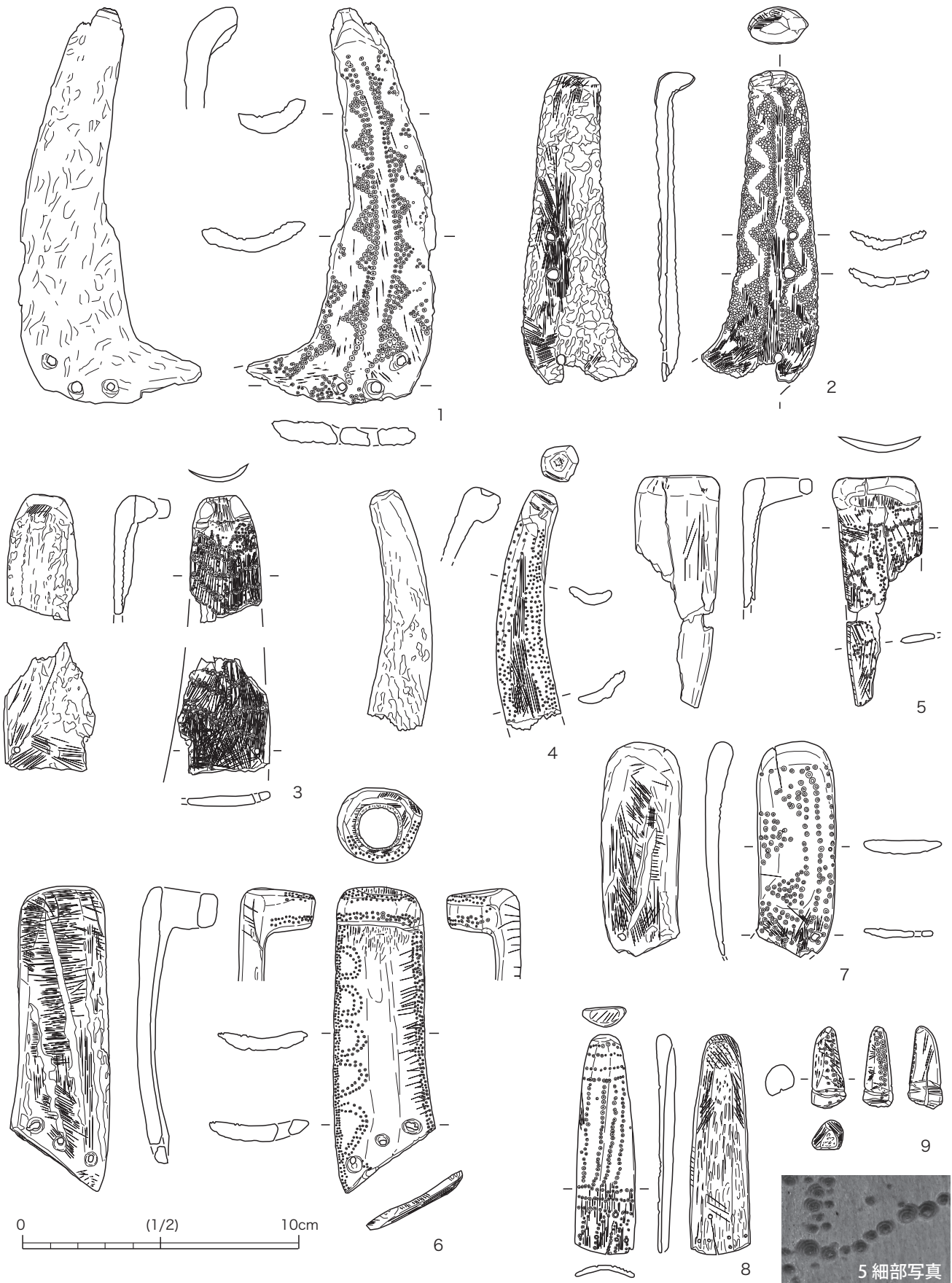


図4 縄文時代早期後葉骨角器1【東名遺跡】(西田編 2009 より加筆修正)

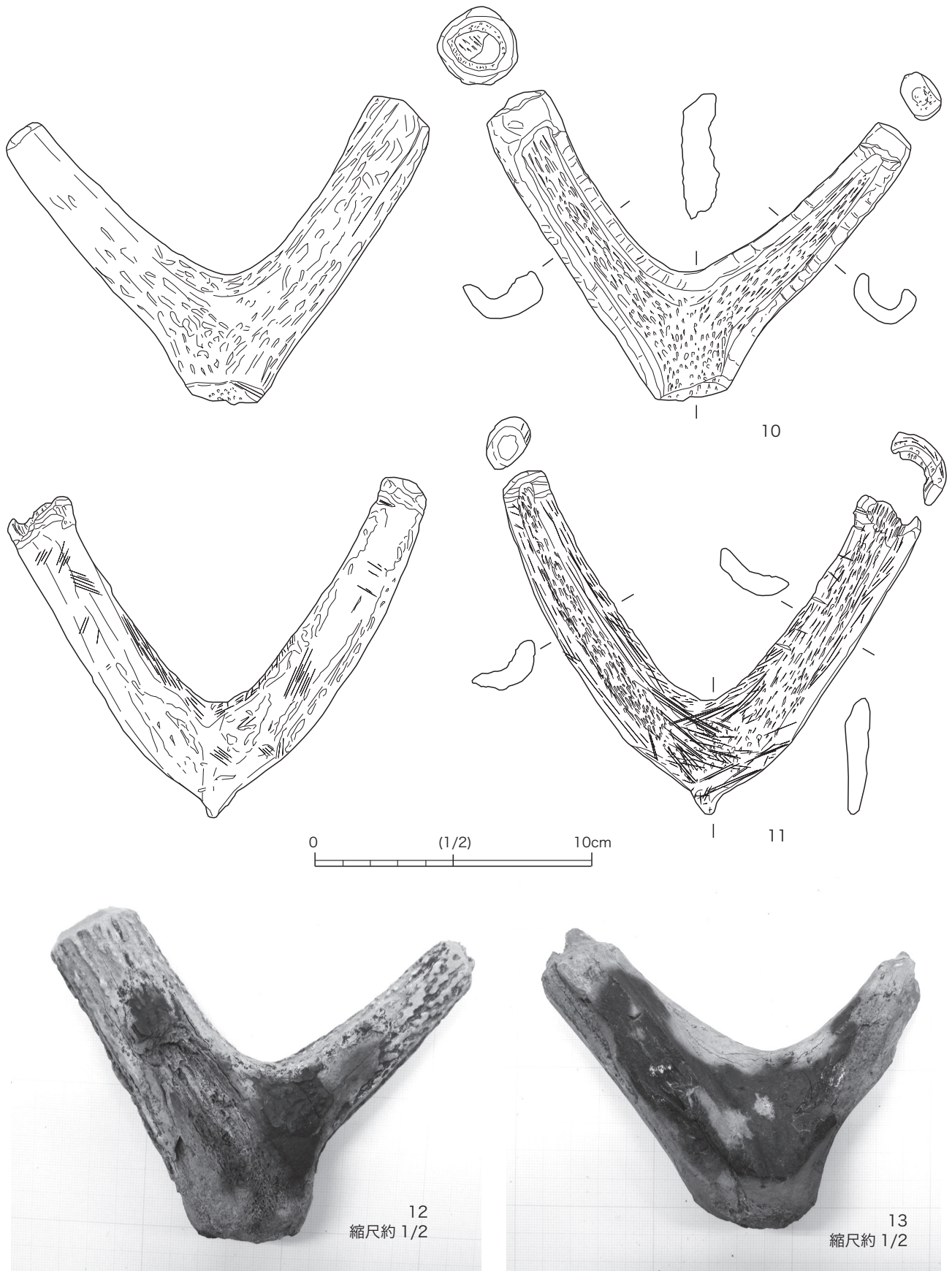


図5 縄文時代早期後葉骨角器2【東名遺跡】(西田編 2009 より加筆修正)

東名遺跡から出土した鹿角は、大多数に人為的な加工使用などがあり、何かの形で利用されていたと思われる。切断は、二又部や角座などでの輪切り状の分割が主体であり、短冊状を意図した加工は行われていない。輪切り状の切断は、周囲からの打ち込み+折り取りと、施溝+折り取り（いわゆる擦り切り）の2つの方法が認められる。出土資料からでは、両者の選択原理を推測することはできなかった。なかには、同一資料の中で、両者が共存しているものもあった。

なお、周囲からの打ち込み+折り取りに対応する工具には磨製石斧、施溝+折り取り（擦り切り）のに対応するものには剥片（石器）が想定される。表面の調整は、砥石による研磨もあるが、剥片（石器）によるケズリによる加工痕も多く認められた。ケズリの過程で加工進行方向とは垂直方向に連続した段の形成が認められるものもあったが、これはごく少数であった。

さて、列点文装身具と関連する器種として、二又部を中心に枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品が報告されている（図5）。非半截状態の材の片側から深く抉るように加工を施すもので、幹側の端は環状に、枝側の端は閉じて箱状となっているものが多い。抉る際には石斧などの工具で敲打・打ち込みして削り取っていくようであるが、その部分が被熱によって黒色化してはじけた状態になっているものを確認した（図5の12・13）。その視点で見ると、局所的に黒色化してはじけているものを多く確認することができた。骨角器製作において、火の使用は想定されるところではあるが、縄文時代早期の事例で明確に残存している事例は希有だと思われる。低地性の貝塚であったことから、このような状態がよく保存されたのであろう。

列点文装身具に関しては、東名遺跡の骨角器および動物遺存体の報告・分析を行った丸山真史・永井理恵らによって、詳細な製作工程の復元案が図6のように示されている（丸山・永井・松井2009）。このなかでは、筆者が触れた製作に火を使用した可能性なども明確に触れられており、きわめて詳細な記述となっている。換言すれば、筆者の観察所見でも、丸山・永井の分析成果を追認するところが多かったこととなる。

また、この東名遺跡出土の列点文装身具については、設楽博巳による論考が知られている（設楽2016・2017）。設楽は列点という文様表現をもとに、韓半島から日本列島全体へ、さらに時代も縄文時代早期から前期、そして中期までを対象に関連づけるものであった。列点文装飾について、西から東への広がりを指摘したものといえる。器種は腰飾りを想定している。

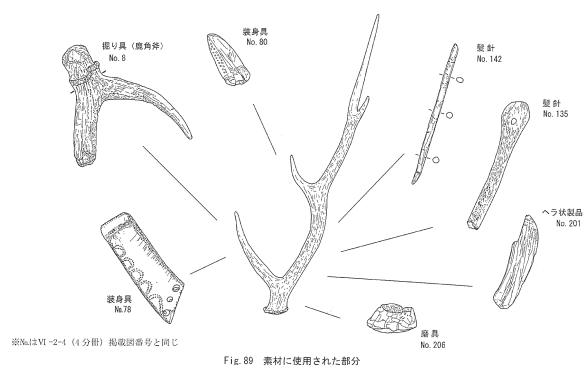


Fig. 89 素材に使用された部分

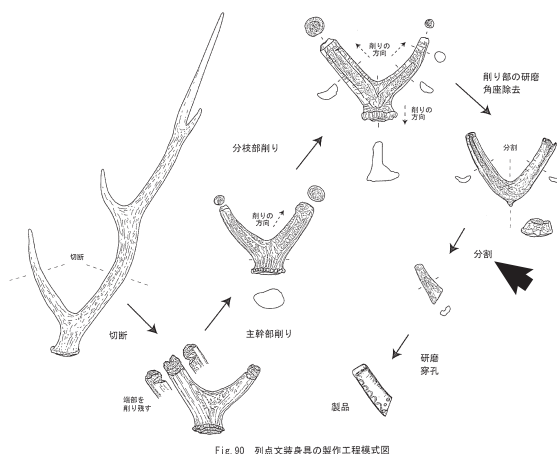


Fig. 90 列点文装身具の製作工程模式図

図6 東名遺跡出土鹿角製品素材使用部位（上）と列点文装身具の製作工程模式図（下）（丸山・永井・松井2009より）

一方、水ノ江和同は縄文時代早期末葉の装身具文様のひとつとして列点文に注目する（水ノ江2021）。縄文時代早期後葉の文様としては、線刻による鋸歯文も特徴的であるが、それを含めて早期末葉から前期前葉には韓半島南部から関東地域にかけて展開していたことを指摘している。

設楽・水ノ江の両者の論考に共通している点は、佐賀県東名遺跡出土資料は、当該時期の骨角器資料として最も充実しているばかりではなく、広域的な共通性を持った意匠の広がりを窺う起点になる資料である、という点であろう。

さて、これら上記の先学の研究動向に対して、筆者が最も注目している点は、以下の2点である。

- (1) 装飾の主体が鹿角素材表面側ではなく、鹿角髄側に施されている点。
- (2) 列点文装身具といわれる装飾が施された「完成品」と考えられるものには、二又部を経由して弧状を呈しているものが、現状では認められない点。

(1)に関しては、縄文全時代を通して見た場合、類例が稀少な極めて特異な事例であることを指摘してお

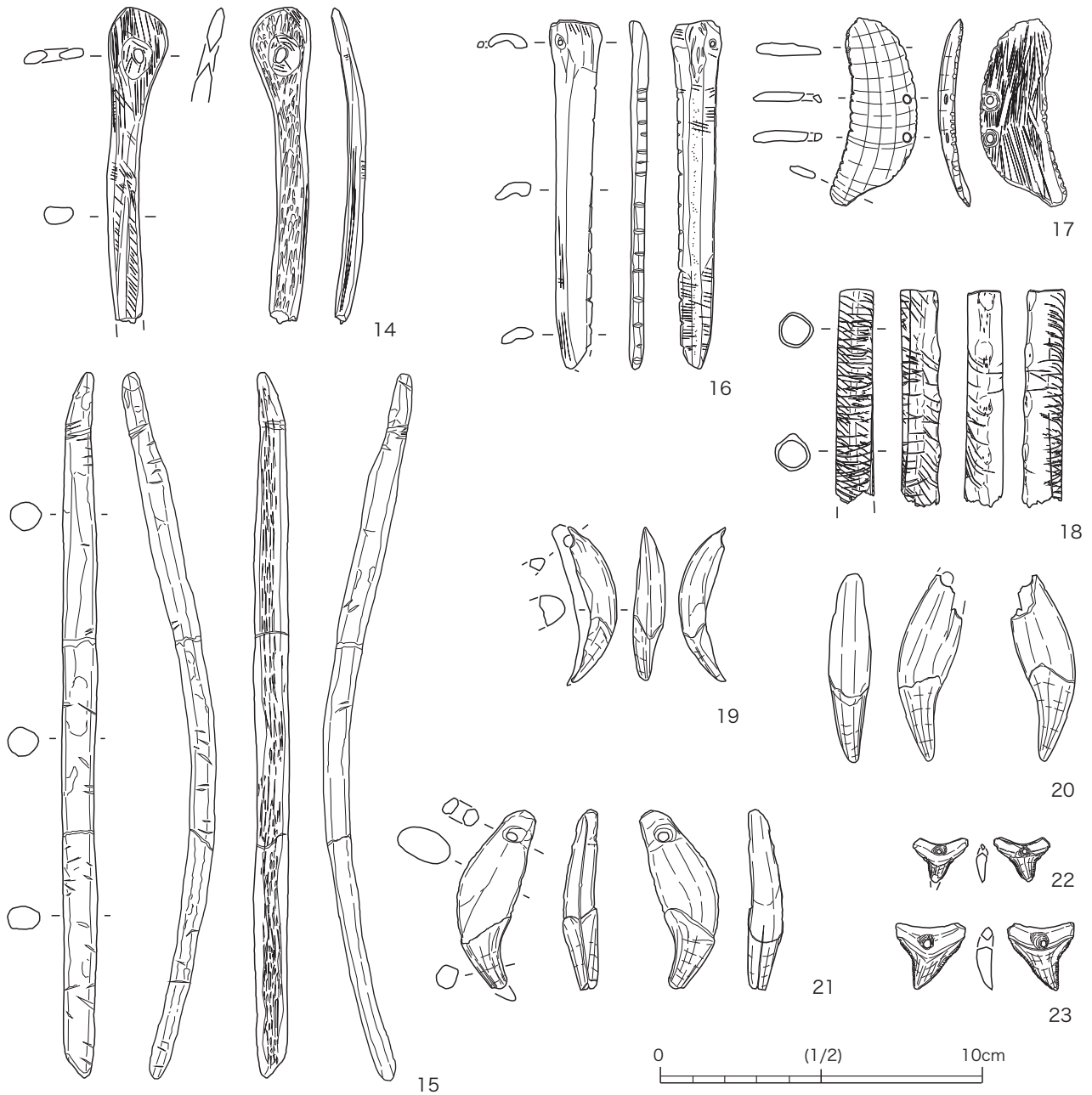


図7 縄文時代早期後葉骨角器3【東名遺跡】(西田編 2009 より加筆修正)

きたい。これは、当時のヒトによる表面が、この装飾のある面だとするならば、特殊な事情がない限り、この面を可視する側にしていたと想定される。特に鹿角に関しては、管見に及ぶ限り、本例のような集中した出土事例はほぼ見当たらない。

(2) に関しては、この製品の来歴の検討が必要であることを示しており、具体的には図6の太矢印(筆者加筆)の検討を行うことを意味する。実際には、以下のように(A)～(C)の三通りの可能性が考えられる。

(A) 図6のように、一旦、枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品を製作し、そこから分割し、細かい凹み装飾が施され、列点文装身具が完成した。

(B) 枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品の状態で、細かい凹み装飾が施された列点文装身具が存在していた。しかし、使用などで欠損し、破損部の再加工の結果、分割された状態となった。

(C) 枝側と幹側が「くの字」状につながった加工品と、列点文装身具とは全く別器種で、製作上の系譜でもつながらないものである。

さて、出土資料に戻ると、1・2・6・7では、細かい凹み装飾が、現存する資料端部で半欠状態となっているものを見ることができる。出土資料は、いずれも細かい凹み装飾が施された当初の状態を示しているとは言えず、いずれも欠損、あるいは欠損部分を再調整

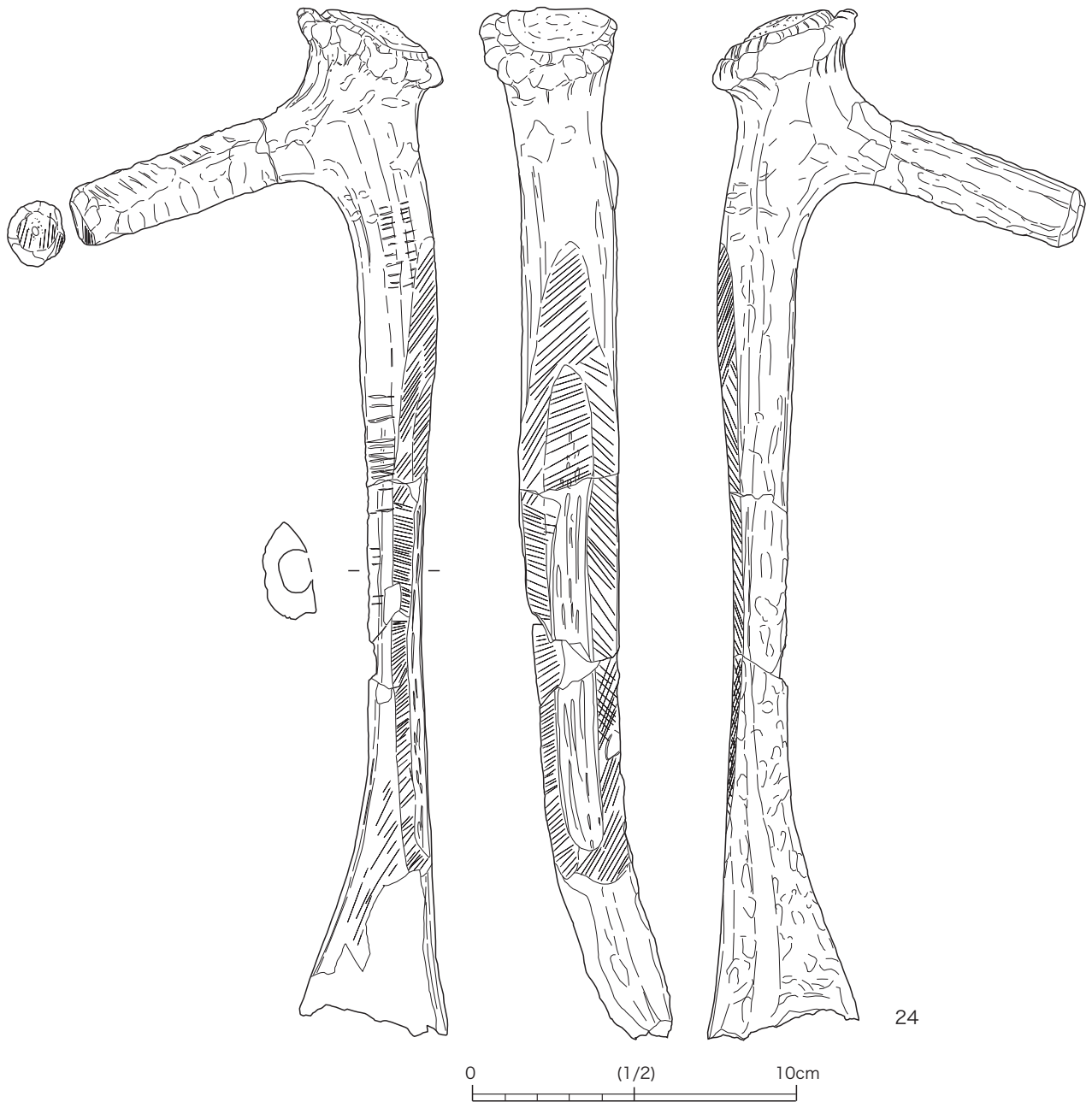


図8 縄文時代早期後葉骨角器4【入海貝塚】

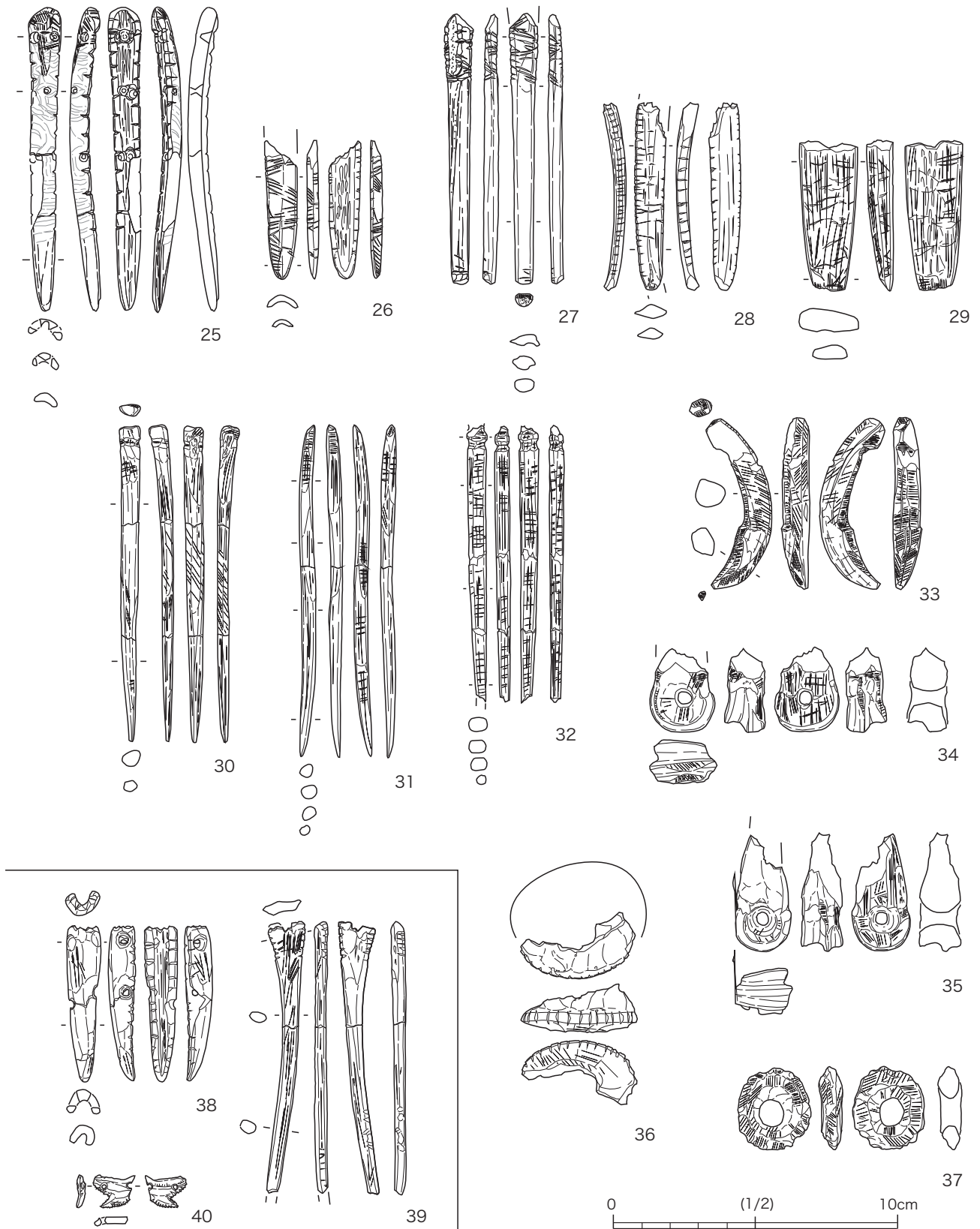
したものの可能性が高いと思われる。このことから、筆者は (B) の可能性が高いのではないかと考えており、本来は二又状を呈する製品器種であったものが、使用により欠損し部分となって遺跡に廃棄されたのではないかと考えられるのである。もしかしたら、祭祀行為など何かの意図で、意識的に分割された可能性も考えられる。

列点文装身具は、本遺跡を代表する鹿角製装身具類であり、東名遺跡の集団を象徴する器種（道具）であった可能性が高い。この器種は、遺跡（集落）内で製作され、そして使用されたものであり、東名遺跡が列点文装身具を製作・使用する中心的な位置を占めていた

といえる。

以下、東名遺跡出土の他骨角製装身具類についても簡単に言及しておく（図7）。

東名遺跡では、刺突具状の製品器種も多く報告されている。鹿角のほか、管状骨製も多い。鹿角製の中で長さ 15 cm を超える最も長いものは、半截状態ではあるが、丸太材状態から削り出して作られた可能性がある（15）。その他の資料を見ても端部が鋭く尖っているものと、丸みを帯びた状態のものがある。前端が尖っているものは端部が稜線が磨滅しているものもあり、使用されてこの状態であると考えられる。そうすると、



25～37：吉井城山第一、38～40：吉井城山第二

図9 縄文時代早期後葉骨角器5【吉井城山第1貝塚・第2貝塚】

全部ではないにしても、多くはヘアピンであった可能性が高いのでは考えられるのである。

牙製垂飾では、イノシシ雄犬歯製が数量的に多い。半截状態となっているもの、部分的に半截状態になっているものが認められるが、弧状を呈する中央に近接して二箇所穿孔を施すものが主体である(17)。側辺端部に細かい刻目が連続して施すのは、素材を越えて共通した装飾方法であったと思われる(16・17)。器面調整は、砥石による研磨が多い。

その他の牙製垂飾では、オオカミ 1 点(19)・ツキノワグマ 2 点(20・21)・イヌ科 1 点・ネズミザメ科 2 点(22・23)を見た。注目すべき資料に、イヌ科のものがある。前面側に、横方法の連続した短い刻みが施されているものであるが、形状から、イヌあるいはキツネの可能性はある。仮にイヌだとすると、イヌの牙製垂飾としては、列島内での最古例となると考えられる。

鳥骨製では、大型鳥の管状骨製のものが 2 点確認されている。そのうち 1 点は、細い線刻によって文様が施されていた(18)。

軟骨魚類では、脊椎骨中央が貫通した穿孔した資料が大量に出土している。法量から、エイ類やネコザメなど小型の魚種に対応する。その他、クジラ骨製の穿孔品が出土している。そのうちの 1 点は、脊椎骨の表面の盤状になった部分の中央に穿孔が施されていた。

3. 縄文時代早期の鹿角製装身具類の関連資料について

筆者は、かつて「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム 24』(川添 2018、以下「前稿」とする)を著したことがある。縄文時代早期後葉(日本列島的には早期末葉)の骨角器の様相を見ると、広域にわたる共通性を有する器種・文様がありつつ、遺跡や地域の特性が認められるとした。

ここでは、前稿で筆者の調査成果を掲載できなかった遺跡資料のなかで、鹿角製装身具類が出土している遺跡について、簡単に追記しておきたい。

1. 愛知県入海貝塚出土資料

入海貝塚は、愛知県知多郡東浦町の衣浦湾に注ぐ境川・逢妻川などが集まる河口付近、境川へと注ぐ小河川の南岸、標高 10 m ほどの段丘上に立地する。貝層は、径 50 m 程度の段丘周辺に、最大幅 10 m 程度の環状に形成されており、北東端の傾斜地での残存が良好である。これまで 4 度の発掘調査が行われたものの、南

山大学の調査のみが報告されている(中山ほか 1955)。

南山大学の調査では縄文土器のほか、石鏃など石器・土偶が出土した。貝層の貝種の主体はハイガイであり、動物骨としては、シカ・イノシシが報告されている。骨角器は、骨製では刺突器 2 点・ヘラ 1 点、鹿角では加工品 1 点、貝製では貝輪 3 点が報告されている。

本稿では、そのうち鹿角の加工品(18)について述べておく。18 は 1 トレンチの地表下 70 cm のレベルから出土した資料である。落角状態の鹿角右を素材として、現存で長さ 31.8 cm・幅 11.7 cm・厚さ 6.0 cm を測る。角座から第一枝と角幹部分で構成されており、第二枝分岐点(二又部)で、角幹および角枝側が欠失しており、全形を窺うことはできない。第一枝先端は面取りによる加工が施されており、最終調整は研磨である。第一枝自体、断面形状が正円に近くやや不自然な形状を呈しているものの、表面風化が激しく、これが人為的加工によるものかは不明である。一方、角幹部の側面には、身部に向かって大きく削ぐような加工が施されている。全体的に研磨による面の形成がなされており、素材の髄部分にまで深く達している。また、表面には動物の噛痕もあるものの、それとは様相の異なる細かい横方向の連続した刻みが施されており、図中の上半から中央に向かって展開している。

2. 神奈川県吉井城山第 1・第 2 貝塚

吉井城山貝塚は、横須賀市吉井町に所在する遺跡で、発見当時は第 1 貝塚から第 3 貝塚まで確認されたという。京浜急行の工事に伴って、遺跡の範囲に掘削が及ぶことが明らかとなったこともあり、昭和 35 年に、横須賀市自然・人文博物館が横須賀考古学会の支援を受けて、第 1 貝塚の調査が実施された。その後、平成に入って周辺を含めて史跡整備に伴う調査が実施されている(野内編 1999)。

出土した骨角製装身具類の中で、主要なものを示しておく(図 8)。25~37 が第 1 貝塚出土(神沢 1962)、38~40 が第 2 貝塚出土資料である。骨角器全体を見ると、幅の若干広いもの、細いものを問わなければ、細いヘラ状、あるいは針(棒)状の資料が著しく多い。頭部の作り出されているものや線刻が施されているものなどを参考にすると、これらのある一定数が装身具類で、おそらく器種としてはヘアピンが多いのではないかと推定される。

図 8 の中で、鹿角製は 25・26・36~38 である。このうち、25・26・38 は角枝部の使用、36・37 は角座部分の加工品である。25 は長さ 10.7 cm・幅 1.2 cm・

厚さ 1.1 cm を測るもので、半截状を呈する素材の髄部分を除去して槌状にし、身部には回転穿孔による装飾が一定間隔で施されており、側面端部には連続した刻目が認められる。25 の類似資料は 38 である。38 は長さ 5.5 cm・幅 1.2 cm・厚さ 1.0 cm と、25 に比べて半分ほどの法量であるが、半截状を呈する素材の髄部分を除去して槌状にする点、身部への回転穿孔による装飾、さらには側面端部への連続した刻目と共通要素が多い。両資料での大きな違いは身部への穿孔の施行面であり、25 は素材裏髄側より表面側へ、38 は素材表面から素材髄側に向かって施されている。また、25 では貫通しない凹み状を呈しているものもあり、東名遺跡の列点文装身具のような顕著な状態ではないものの、素材髄側がこの製品器種では表面であった可能性も考えられる。36 はシカ角座部分を輪切り状にして、端部に連続した刻目を入れたものである。37 もシカ角座部分を輪切り状にして中央に大きな穿孔をして環状にしている。いずれも幼獣・若獣を素材にしたものであろう。

25・28・36・38・39 は加飾性の高い資料と言えるであろうが、このうち鹿角でないものは、27・28・39 である。27 は鋸歯状の集合沈線状の線刻が施されたものでイノシシ腓骨製、28 は側辺の連続した刻目のある獣骨肋骨製である。39 も側辺の連続した刻目のあるものでシカ中手中足骨製と思われる。このように、装飾は側辺の連続した刻目と鋸歯状の集合沈線状の線刻が主体で、剥片石器によって施されたものであろう。

その他、垂飾として、シカ中足骨の遠位端の滑車形状部を半分に割り、滑車部中央に穿孔を加えたものも 2 点存在している (34・35)。イノシシ雄上顎牙の加工品は、弧の内側に段が形成されたものであった (33)。表面の調整痕を見ると、イノシシ雄牙製は全面砥石による研磨であったが、それ以外の器面最終調整は、剥片石器などによるケズリが主体と思われた。特に、ヘアピンと考えられる資料や、シカ中足骨の遠位端滑車形製品に、その痕跡をよくみることができた。ヘアピンの頭部装飾の挟りも、緩やかな形状を呈していることから、擦切切断のような施溝によるものではなく、ケズリによって施された可能性が高いと考えられる。

4. 鹿角製装身具の広域性と地域性

以上のように、骨角製装身具類の中でも本稿では鹿角素材を中心に見てきた。鹿角は当時一般的に入手可能で、広く使用された素材であるものの、遺跡からの出土資料で見ると、鹿角を用いた装身具類が稀少な場

合、また利器・工具類を含めても鹿角製品自体の出土が稀少である場合など、現状では遺跡による偏差もある。利器・工具類では、当時一般的に広く使用されていた器種として、鹿角斧が候補に挙がる (川添 2018・2019、板垣 2020)。特に大型の鹿角素材は土掘り具として多用されたと考えられ、打製石斧が出現する前の縄文時代早期においては、特に重宝されたであろう。入海貝塚の事例は、大型の素材に加工を加えたもので、この鹿角斧素材使用に対応するのかもしれない。

吉井城山第 1 貝塚・第 2 貝塚では、鹿角半截材に対応する器種として、角幹部ではペン先形の刺突具、二又部では釣針が主体をなしていた。この資料群での鹿角素材の装身具類を見ると、角幹部分にしても角座部分にしても、幼児・若獣の個体を素材としており、利器・工具類とは素材使用の原理が異なっていたことが想定される。

一方、東名遺跡の様相は、上記とは大きく異なるようである。多量の鹿角素材が出土しているにも関わらず、鹿角斧の出土数が極めて少ないことが特徴としてあげられよう。製作関連器種でみると、施溝や敲打など、鹿角素材に対して分割する意図が多く認められ、その有り様は、鹿角斧としての製作・使用とは異なる加工が、随所に認められると言える。但し、東名遺跡では、鹿角素材を細く (薄く) する際には、縄文時代後期以降に多用される分割による方法ではなく、非半截状態の素材もとから火を使用するなどをしてケズリ取ることによって素材を獲得している傾向が強いようである。

文様について見ていくと、やはり列点文が注目されるが、同時に器種側面に施される連続した刻目も、当該時期の骨角製装身具類に多用される装飾であるといえる。これは鹿角のみではなく、骨製・牙製にもあって、動物性素材であれば素材の種類に関係なく広く認められる特徴であった。その刻目は細かく連続するものが多い。前稿で取りあげた天神山遺跡例のように複数を一単位として施される場合もあるようである (川添 2018)。

以上、鹿角製を中心に骨角製装身具類を俯瞰すると、広域的に共通する要素と同時に、地域的な特徴が表出している点も確認できる。換言すれば、当時の集団間の活動や移動、情報の広がりにおいて、時代・時期的志向性が働いていた一方で、地域的な適応をみることができる。今後も縄文時代早期後葉の社会的な広域ネットワークを考える好例として、継続した検討が必要であろう。

本稿を草するにあたり、以下の機関および方々からご配慮およびご教示を賜った。謝意を表する次第である。

佐賀市教育委員会、南山大学人類学博物館、横須賀市教育委員会

設楽博己・西田巖・丸山真史・水ノ江和同・野内秀明

なお本稿は、JSPS 科研費【課題番号 20K01080】「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」、【課題番号 24K04355】「骨角製装身具類着装原理からみた縄文／弥生社会の解明」、いずれも基盤研究 (C) (研究代表者 川添和暁) の成果の一部である。

参考文献

板垣優河 2020 「縄文時代の鹿角斧について」『古代文化』72-2 72～84 頁 公益財団法人古代学協会
川添和暁 2018 「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム』24. 33～51 頁 考古学フォーラム編集部
川添和暁 2019 「打製石斧とその周辺」『東海石器研究』9 10～19 頁 東海石器研究会

神沢勇一 1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品 (一)」『横須賀市博物館研究報告 (人文科学)』6 57～68 頁。横須賀市博物館。

設楽博己 2016 「東名遺跡からみえる証文時代早期の精神文化」『東名遺跡群Ⅳ 東名遺跡群総括報告書 第4分冊』132～143 頁 佐賀市埋蔵文化財調査報告書 100

設楽博己 2017 「縄文人のこころと祈り」『縄文の奇跡! 東名遺跡』172～179 頁 雄山閣

中山英司ほか 1955 『入海貝塚』東浦町教育委員会
西田 巖編 2009 『東名遺跡Ⅱ 第4分冊』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集

西田 巖ほか (佐賀市教育委員会編) 2017 『縄文の奇跡! 東名遺跡』雄山閣

丸山真史・永井理恵・松井 章 2009 「骨角製品の製作と加工技術」『東名遺跡群Ⅱ 第6分冊』187～199 頁 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第40集

水ノ江和同 2020 「縄文時代早期末葉の装身具類」『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集—』223～231 頁 吉留秀敏氏追悼論文集刊行会

野内秀明編 1999 『吉井城山』横須賀市文化財調査報告書第34集

